ジャータカにみる手紙
――古代インド文字文化断章――

水　野　善　文

はじめに

かつて，インドの表現文化を探るという視点から，サンスクリット文学および中世ヒンディー文学の諸作品のなかにあらわれる「手紙」を概観したことがあった[1]．その際は，カーリダーサの諸作品を初めとするカーヴィヤやプラーナ文献から「手紙」の描写箇所を，先行研究［Banerji, 1958, 1977］も参照しつつ見渡し，併せてサンスクリットの「手紙の書き方帳」［Banerji, 1960］も紹介したが，表現方法を探るという趣旨から，記されない伝言（sandeśa-），すなわち『メーガ・ドゥータ』に発するところの使者文学に的を絞って，そのレトリックの一部を解説した．

そうした関心のもと，手紙のより古い例を調査すべく，今回はジャータカを材料とすることにした．周知の通りジャータカは民間説話に取材しているから，ひろく一般社会における文字文化の一端としての手紙の習慣を探りうるのではないかと予想するからである[2]．

手紙文の表出箇所

手紙を含意するパーリ語には，paṇṇa-, lekha-, sāsana-, sandesa- 等があり［Buddhadatta，他］，そのジャータカにおける用例はインデックス［Yamazaki］によって一目瞭然であるが，ここでは手紙の内容に基づいて分類しながら紹介しよう．手紙の文面が記述されている箇所を中心に，のちに検討する手紙の素材との関連で文面の長さを知るため，文面をそのまま引用し，他は必要に応じて言及するにとどめる．（なお，パーリ文の引用はPTS版（巻数：頁：行），和訳は春秋社版による．）内容に基づけば，(1) 公的書簡，(2) 契約文書，(3) 私的書簡，と大まかに分類できる．

(1) 公的書簡

Ⅰ :178:28 = J23・7 人の王→バーラーナシー王への信書（paṇṇaṃ）: amhākaṃ rajjaṃ vā detu yuddhaṃ vā（我々に王国を与えよ．さもなくば戦いだ．）

Ⅰ :263:25 = J51・コーサラ王からシーラヴァ王への信書（sāsanaṃ）: rajjaṃ vā detu yuddhaṃ vā（国を渡せ，さもなくば戦いを）

・シーラヴァ王の返書（paṭisāsanaṃ）: n'atthi mayā saddhiṃ yuddhaṃ, rajjaṃ upasaṃkamitvā（私と戦うことはない．国を取るがよい．）

Ⅰ : 409 : 18 = J100・祖国バーラーナシーを奪われた王子→コーサラ王への手紙（paṇṇaṃ）: rajjaṃ vā detu yuddhaṃ vā（王国をかえせ，さもなくば戦え）・返書（patipaṇṇaṃ）: yuddhaṃ demi（戦おう）

Ⅰ : 437 : 17,438 : 5,439 : 25 : J120・バーラーナシー国の辺地に派遣されていた将軍→ブラフマダッタ王への手紙（paṇṇaṃ）: ito uttariṃ mayaṃ na sakkomā（今後，私たちだけでは治まることが出来ません）

・凱旋途中のブラフマダッタ王→都に残ったボーディサッタへの手紙（paṇṇaṃ）: nagaraṃ paṭijaggāpetu（都を整えよ）

・（出征中の王から王妃へ消息を伝える）手紙（paṇṇaṃ）をもってきた 64 人の男・・

Ⅱ : 21 : 11 = J156・大工の町の人々からコーサラ王への信書（sāsanaṃ）: amhākaṃ rañño aggamahesi paripuṇṇagabbha, 'ito kira sattame divase puttaṃ vijāyissatīti' āṅgavijjāpāṭhakā āhaṃsu, sace sā puttaṃ vijāyissati mayaṃ sattame divase yuddhaṃ dassāma, na rajjaṃ, etatakaṃ, kālaṃ āgamethā（わたしたちの王妃は臨月です．占い師が，これから七日目に男の児が生まれるだろうと言っておりますから，もしも七日目に男児が生まれたら，わたしたちは戦います．決して王国はお渡ししません．その時まで待ってください．）

Ⅱ : 74 : 22 = J176・辺境の兵士→王への有事を知らせる手紙（paṇṇaṃ）〈文面なし〉

Ⅱ : 90 : 8 = J181・7 人の王→バーラーナシー王への信書（paṇṇaṃ）: rajjaṃ vā detu yuddhaṃ vā（国を与えよ．さもなくば戦え．）

Ⅱ : 94 : 21 = J182・敵の王→バーラーナシーのブラフマダッタ王への信書（paṇṇaṃ）: rajjaṃ vā detu yuddhaṃ vā（国を与えよ．さもなくば戦え．）

Ⅱ : 104 : 8 = J186・カーシ国の男→バーラーナシー王への信書（paṇṇaṃ）: yuddhaṃ vā me detu rajjaṃ vā（戦うか，さもなくば王国を与えよ．）

Ⅲ : 4 : 13 = J301・アッサカ国のナンディセーナ大臣→カーリンガ国王への信書（sāsanaṃ）: attano rajjasīmāyam eva hotu, mā amhākaṃ rajjasīmaṃ otaratu, ubhinnaṃ ra-

jjānam antare yuddhaṃ bhavissati（ご自分の領土内にとどまりなされ．われわれの領土内に侵入なさるな．戦は二者の領土の中間にて行なおうではないか．）

III：8：7，9〈同上〉・ナンディセーナ→カーリンガ国王への親書（sāsanaṃ）：imesaṃ catunnaṃ rājakaññānaṃ dāyajjakoṭṭhāsaṃ pesetu, sace na peseti kātabbam ettha jānissāmi（こちらの4人の王女様がたに財産の分け前をお送りくだされ．もしお送りくださらぬときには，こちらにもどうすべきか期するところがありますゆえ．）

III：498：18＝J431・大臣たち→王への手紙（paṇṇaṃ）：hāritatāpaso evam akāsi（ハーリタ苦行者は，このようなことをしております）・・・

IV：133：4＝J462・99人の兄である王子たち→サンヴァラ大王への手紙（paṇṇaṃ）：chattaṃ vā no detu yuddhaṃ vā（我々に傘蓋をよこせ．さもなくば戦だ．）

V：300：23＝J531・サッカの七人の王たちへの信書（sāsanāni）：pabhāvatī kusarājānaṃ chaḍḍetvā āgatā, āgacchantu pabhāvatiṃ gaṇhantu（パバーヴァティーがクサ王を捨てて帰って来た．（望みとあらば）こちらへ来て，パバーヴァティーを得られたい．）

V：300：28　〈同上〉・信書（sāsanāni）：sabbesam pi amhākaṃ, pabhāvatiṃ vā detu yuddhaṃ vā（パバーヴァティーをわれわれ全部に与えるか，それとも戦争か．）

V：443：23＝J536・バカ王→パーヴァリヤ王への手紙（paṇṇaṃ）：bhariyaṃ vā me detu detu yuddhaṃ vā（妻をわたすか，それとも戦いか？）

V：458：14,15＝J537・バーラーナシーその他の王が贈り物（paṇṇākārena）と一緒に（saddhiṃ），忠告を守っている旨，手紙（paṇṇāni）をスタソーマに出した．スタソーマの返事（paṇṇāni）：appamattā hothā（怠らぬように．）

VI：334：10＝J546・大臣→王への手紙（sāsanaṃ）：deva pācīnayavamajjhakagāme sirivaḍḍhaseṭṭhiputto ma-paṇḍito nāma sattavassiko va samāno evarūpan nāma sālaṃ kāresi, pokkharaṇim pi uyyānam pi kāresi, imaṃ p-aṃ gahetvā ānemi mā ānemi（王様，東ヤヴァマッジャカ村に，シリヴァッダカ長者の息子でマホーサダ賢者という，未だ七才でありながら，このような（りっぱな）堂を建てた（者がおります）．蓮池や庭園も造らせました．この賢者を（王宮に）つれて参りましょうか．如何致しましょうか．）

VI：335：2,8,11,13,17〈同上〉・大臣→王への手紙（sāsanaṃ）：p. iminā nāma upāyena maṃsapesiṃ chaḍḍāpesi idaṃ devo jānātu（賢者はこれこれの方法を用いて，（鷹から）肉を吐き捨てさせました．このことを王様はお分かりください．）

・親書（sāsanaṃ）：tatth' eva naṃ vīmaṃsatu（その村で（さらに）賢者を試験せよ．）

・村民への命令書（sāsanaṃ）：rāja dolāya kīṁitukāmo rājakule ca purāṇavālukayottaṃ chinnaṃ ekaṃ vālukayottaṃ vaṭṭetvā pesentu apesentānaṃ sahassaṃ daṇḍo（王はブランコ遊びをしたいと思っておられるが，王宮には古い砂の綱がきれてしまったので，（新しい）砂の綱を送ってよこせ．送ってこなければ千金の罰だ．）

VI：403：13,17・ブラフマダッタ王→ヴェーデーハ王への手紙（paṇṇaṃ）：sve dhammayuddhaṃ bhavissati dvinnaṃ paṇḍitānaṃ, dhammena samena jayaparājayo bhavissti, yo dhammayuddhaṃ na karissati so parājito va nāma bhavissati（明日，二人の賢者のあいだで，正々堂々の戦いがある．正しく平等に勝敗がつけられる．正々堂々の戦いをしない者はまけになるであろう．）

(2) 契約文書

I：230：5ff＝J40・借金の証文（paṇṇa-）

(3) 私的書簡

I：409：18＝J100（既出）・王子の母→王子への手紙（paṇṇaṃ）：yuddhena kammaṃ n'atthi, sabba-disāsu sañcāraṃ pacchinditvā Bārāṇasi-nagaraṃ parivāretu, tato dārūdaka-bhatta-parikkhayena kilanta-manussaṃ nagaraṃ vinā va yuddhena gaṇhissati（戦っても仕方ない．すべての方向の交通を遮断して，バーラーナシーの街を孤立させなさい．そうすれば，薪や食物がなくなって，人々は疲弊し，戦わずして，街を手に入れるでしょう。）

I：451：29 ff＝J125・召使いの息子が豪商の子になりすますべく自ら書いた手紙（paṇṇaṃ）：aham asukaṃ nāma mama puttaṃ tava santikaṃ pahiṇiṃ, āvāhavivāhasambandho nāma mayhaṃ tayā tuyhañ ca mayā saddhiṃ patirūpo, tasmā tvaṃ imassa dārakassa attano dhItaraṃ datvā etaṃ tatth' eva vasāpehi, aham pi okāsaṃ labhitvā āgamissāmi（私はこのような名前のものです．私の息子をあなたのもとに使いに出しました．婚姻関係は，私にとっても，あなたにとってもともに相応しいことです．だから，あなたは，この息子にご自分のお嬢さんを与えて，彼をそこに住まわせてください．私も折をみて参りましょう．）

○II：174：1,3,25＝J214・バーラーナシー王→追放した顧問僧ボーディサッタを呼び戻すため，木の葉（paṇṇaṃ）に詩をしたためた：puṇṇaṃ nadiṃ yena ca peyyam āhu. jātaṃ yavaṃ yena ca guhyam āhu. dūraṃ gataṃ yena ca avhayanti. so ty-āgato handa ca bhuñja brāhmaṇa.（人々は溢れた川を，その［鴉］によって飲めるといい，生育した大麦を，その［鴉］を隠せるといい，また，その［鴉］によって，遠方に行ったものが［帰って来つつあると］語る．その［鴉］が今来た．さあバラモンよ，食べなされ！）

IV：38：16＝J445・子を孕まぬことを咎められ，身重を装って実家へ向かった商人の妻が，隊商の女の赤子を拾い，ラージャガハの嫁ぎ先に手紙（paṇṇaṃ）を送った．その返信：vijātakālato paṭṭhāya pitu kule kiṃ karissati, idh' eva āgacchatu（生まれたからには，父親の家に行くことなどありません．こちらへ帰っていらっしゃい．）

○IV：55：17＝J447・ダンマパーラの師匠がDの父親に若者が死なない訳を訊ねた回答，つまり法の道を（ターラ樹の）葉（paṇṇe）に書き取り（likhitvā）云々：法の道（8偈分（gāthā78-85））〈引用省略〉

IV：105：4＝J458・カーシ王から王子として生まれたボーディサッタへの手紙（sāsanaṃ）（伝言？）：nāṭakāni'ssa paccupaṭṭāpessāmi（（お前を）王の位に灌頂し，その即位の式典をとりおこなおうと思う.）

IV：147：2＝J465・シャカ族の王マハーナーマが下女に生ませた娘を，そうとは知らせずコーサラ王に嫁がせた．その王女になりすました女に王子が生まれ，16才に成長したとき，音沙汰のない母親の実家に行きたいと言うので，彼女は実家に手紙（paṇṇaṃ）を送った.：aham idha sukhaṃ vasāmi, sāmino māssa kiñci antaraṃ dassayiṃsu（私はこの地で幸せに暮らしております．どうか皆様方は，王子に内実をお漏らしになりませんように.）

IV：150：29，ff：〈同上〉・コーサラ王の将軍バンドゥラの妻マッリカー宛てに，夫と32人の息子の死を知らせる手紙（paṇṇaṃ）：sāmikassa te saddhiṃ puttehi sīsaṃ chinnaṃ（ご主人様の首が息子さんたちとともにはねられました.）

IV：169：7,13,20＝J467・バーラナシー王ブラフマダッタの二人の息子のうち兄は，権勢を嫌い辺境の地で暮らしていたが，身分がばれて，地方の長者に乞われて，弟である王に宛て書いた手紙（paṇṇaṃ）：ahaṃ asukaseṭṭhikulaṃ nāma upanissāya vasāmi, mam nissāya etesaṃ baliṃ vissajjehi（私はこれこれの長者の家に厄介になっている．私に免じて，この者たちの税を免除してやってもらいたい.）

VI：31：10＝J539・ポーラジャナカ童子から兄への書状（sāsanaṃ）：nāhaṃ pubbe tumhākaṇ verī idāni pan`amhi verīti chattaṃ vā me detha yuddhaṃ vā（以前わたしはあなたに怨みを抱いていなかったけれど，いまは恨んでいるのだ．私に傘蓋を与えよ．そうでなければ戦争だ.）

VI：369：10,13：J546（既出）・（アマラーデーヴィー王冠の入ったバターの壺をセーナカの女中から受け取って）「asukamāse asukadivase senakācariyo asukadāsīdhītāya asukāya nāma hatthe rañño cūṁāmaṇiṃ paheṇakatthāya pahīṇi（某月某日，セーナカ先生が，某女中娘の手を通して，王の宝冠を進物として贈ってきた）」と貝葉に（paṇṇe）したためて（likhitvā）もっていた.

・（カーヴィンダは毛布（kambalaṃ）を）貝葉で作った籠に（paṇṇa-pacchiyaṃ）入れて贈ってきた.

・（アマラーデーヴィーは，これらすべてを受け取り）貝葉に（paṇṇe）（［贈り主の］名前や［進物の］中身などを（nāmarūpaṃ）明示し（āropetvā）・・

VI：385：13,18（paṇṇākāraṃ），20＝J546（既出）・ウドゥンバラー妃→弟ボーディ

サッタへ，モーダカ菓子の中に埋め込んだ手紙（paṇṇaṃ）：mahosadha, cattāro paṇḍitā taṃ paribhindiṃsu, rājā kuddho sve dvārantare tava vadhaṃ āṇāpesi, sve rājakulaṃ na āgaccheyyāsi, āgacchanto pana nagaraṃ hatthagataṃ katvā samattho hutvā āgaccheyyāsi（マホーサダよ，四人の賢者は，おまえを［王に］讒言しました．王は怒って，明日門内でおまえを殺すことを命じました．明日は，王宮へはこないほうがよいでしょう．しかし，くるならば，都を［おのが］手中に治め，実力をつけてから，やって来なさい．）

予想以上に頻出し，文字文化の浸透ぶりにまず驚かされるが，こうして整理してみると，王への信書などの公的書簡は内容を完結に記した比較的短いものが多く，私的書簡はそれより長めの文面が多いことが確認できる．一番長いもの（J447,8 偈分）でも，一葉に収まりきりそうだが，素材を知る手掛かりを見てみよう．

手紙の素材

筆記用の紙類に関して，インド一帯ではターラ樹の葉（貝葉）が，ヒマーラヤ地方では樺の木（bhūrja-）の内皮（tvac-）が使われていた［Basham:401］といわれ，後者については『クマーラサンバヴァ』（I ,7）の描写でも知られる[3]．また，アレクサンダー大王東征軍（BC.326）の司令長官ニアルコス（Nearchos）が，インドには綿を擦りつぶしてつくる筆記用の紙が存在したと語ったとも言われる［Murthy:34］［Pandey:6,71,84］が，「鳥に託す」（III :134:16,ff = J343），「牝象に結びつける」（III :386:23,387:9 = J409），「矢に縛りつけて」（VI :400:29,30 = J546）といった描写をみると，かなり柔軟性のある素材に筆記したことが推測される．さらに「モーダカ菓子の中に埋め込んだ・・」（VI :385 = J546）となると，それなりの耐久性をもったものでなければならない．樺の内皮も丸めることができるようだが，そうだとするとこの話は，北方インドに発したものなのだろうか．民話の起源にまで関わっていく問題だが，ここでは指摘だけに留める．

いわゆる紙様のもの以外では，黄金の板にかなり長い文言を刻んだ例が 2 カ所（II :36:20 = J159, IV :335:19 = J491），「イヤリング，金の靴，金のネックレスに『わたしのすべきことがあれば知らせよ』という文字を刻みつけ（adhiṭṭhahitvā）・・」という記述（VI :390:19-20 = J546）も見られる．

発信者・受信者と文字文化

手紙の発信者および受信者の職種に注目してみると，王族およびその家族や臣下たちといった例が多かったが，発信者に，辺境の兵士（II :74:22 = J176），密偵（VI :400:29,30 = J546）のほか，象使い（IV :92:25 = J455），町人（II :21:11 = J156），商人の妻（IV :38:16 = J445）などもいて，文字文化がかなり広く浸透していた様子がこの点からも窺える．とりわけ J125「カターハカ前生物語」には，豪商の息子が石版でもって読み書きを学んだこと，その豪商の召使いの息子が同い年で，師の家まで石版を運ぶ役であったが，まさに門前の小僧のように読み書きを修めたことが記述されていて興味深い．

おわりに

今回抽出した手紙文面の諸例のうち，○印を付した2カ所のみが，韻文，いわゆる経典部分からのもの（J447 の例は，それがそのまま書き記されたか否か曖昧であるが）であり，それ以外はすべてアッタカター（注釈）部分であったから，文献の成立という点では，時代がカーリダーサ（4世紀）と大差ないか，もしくはむしろ，より後代になってしまうのかもしれない．［干潟：41］歴史的考察には慎重を要するわけだが［Winternitz:14］，ジャータカの作品としての成立問題［Geiger:30-32］［Hinüber:54-58］はともかく，個々の民話としての成立はさらに遡るはずであり，長く口頭伝承されてきたはずである．口承文芸のなかに文字文化の片鱗を窺うという，些かトリッキーな試みであったかもしれない．

註

1）大正大学表現文化研究会，編集中「インドのラヴレター —心情伝達のレトリック— 」．ならびに未公表稿「インド古典に見る手紙の諸例と使者文学」

2）Gombrich［1988］，下田［1997:47-,431-433］らが議論するところの，文字文化と大乗仏教の興起との関係について，ここでは直接云々するつもりはない．

3）nystākṣarā dhātu-rasanena yatra bhūrja-tvacaḥ kuñjara-bindu-śoṇāḥ,
vrajanti vidyādhara-sundarīṇām anaṅgalekha-kriyayopayogam.
［Kale, M.R.,ed., 1981（7th ed.），*Kālidāsa's Kumārasambhava, Cntos 1-8*, Delhi: Motilal Banarsidas. :4,167, 227-228］和訳：ここ〈ヒマーラヤ地方〉では，鉱物の〈赤い〉液（dhātu-rasa）で文字（akṣara）が記されて，〈成長した〉象が〈こめかみから出る発情期の〉滴で赤く染まるように，赤くなる樺の木（bhūrja）の樹皮（tvac）は，〈ヒマーラヤ地方に在住の〉有識部族（vidyādhara）の美しき妖精たちが恋文〈＝愛（anaṅga）の手

紙（lekha)〉をしたためるからこそ，役立つものとなるのです．（〈　〉内は筆者によって補った部分．）

参考文献

Banerji, Sures Chandra,1958, "A Study of Epistolary and Documentary Literature in Sanskrit", *Indian Historical Quarterly*, vol.XXXIV, Part 3&4, pp.226-250.

Banerji, Sures Chandra,1960, "Patra-kaumud of Vararuci", *Bulletin of the Deccan College Research Institute*, vol.XX, Part 1-4, pp.3-18.

Banerji, Sures Chandra,1977, "Epistles and Documents in Sanskrit", *Our Heritage, Bulletin of Department of Post-Graduate Training and Research, Sanskrit College, Calcutta*, vol.XXV, Part 2, Calcutta, pp.3-20.

Basham, A.L., 1967, *The Wonder that was India*, Calcutta etc.（バシャム　A. L. 著，日野紹運・金沢篤・水野善文・石上和敬　訳，2004，『バシャムのインド百科』山喜房仏書林）

Buddhadatta, Mahathera, 1995, *English-Pali Dictionary*, Oxford: PTS.

Fausbøll, V., ed., 1962-64, *The Jātaka together with its Commentary being tales of the Anterior Birth of Gotama Buddha*, 6vols, London : PTS.

Geiger, Wilhelm, 1996 (1st ed. 1943), *Pali Literature and Language*, New Delhi; Munshiram Manoharlal.

Gombrich, R. 1988, "How the Mahāyāna began", *Journal of Pali and Buddhist Studies*, vol.1,pp.29-46.

von Hinüber, Oskar, 1996, *A Handbook of Pāli Literature* (Indian Philology and South Asian Studies,vol.2), Berlin:Walter de Gruyter.

Kale, M.R.,ed., 1981 (7th ed.), *Kālidāsa's Kumārasambhava, Cntos 1-8*, Delhi: Motilal Banarsidas.

Murthy, R.S. Shivaganesha, 1996, *Introduction to Manuscriptology*, Delhi : Sharad Publ.House.

Pamdey, Raj Bali, 1957, *Indian Palaeography*, 2nd ed., Varanasi : Motilal Banarsi Das.

Winternitz, M.,1928, "Jataka gatha and jataka commentary", *The Indian Historical Quarterly*, vol.4, no.1.

Yamazaki, M & Y.Ousaka, 2003, *Index to the Jātaka*, Oxford; PTS.

下田正弘，1997，『涅槃経の研究 大乗経典の研究方法試論』春秋社.

中村元　監修・補註，1982-1991，『ジャータカ全集』春秋社.

干潟龍祥，1976，『ジャータカ概観』改訂版，パドマ叢書 2，鈴木学術財団.

〈キーワード〉 paṇṇa-, sāsana-, 樺の内皮，貝葉，口承文芸

（東京外国語大学　助教授）

scribe of the ms. knew the *Ṣaḍḍantāvadāna* of the *Kalpadrumāvadānamālā* (v. de Jong (1977), p. 32).

66. The Custom of Writing Epistles in the Pāli *Jātaka*: literacy in ancient India

Yoshifumi MIZUNO

The aim of this paper is to contribute to the knowledge of the development of literacy in ancient India by researching the custom of writing epistles found in the Pāli *Jātaka*. Because this text contains many descriptions of epistles, some of which were written by townsmen and a merchant's wife, we can assume that the custom of writing epistles was more widespread than our current estimate. We can also find some indication regarding the types of materials that were used for writing epistles. Since we are aware of only two examples in canonical verses (gāthā) and others in later commentaries (*Jātakatthavaṇṇanā*, etc.), we cannot definitely ascertain the inception and duration of the custom of writing epistles in India. However, this research can help us acquire other information on this phase of development of literacy in ancient India.

67. On the Buddha's first words: 'pātubhavanti dhammā' (Vin.I. 2[3])

Shinkan MURAKAMI

The Pāli tradition mentions two kinds of the Buddha's first words: one corresponds to Dh.153-4, the other denotes the first three verses of Vin.I (= Ud.1-3). According to the former, the Buddha, having discovered the craving which makes His own existence in transmigration, destroyed mental defilements and ignorance with which His existence is covered just like with a roof. Then He attained the extinction of the cravings. The latter occurred to Him after having considered dependent origination (*paṭicca-samuppāda*) through the night under the Bodhi-tree. Here the constituent elements of human existence (*dhammā*) become clear (open) to the Buddha. Among these el-